徳大生大活躍！

Gambaru Tokudaisei

［取材］

「食べる」を考える展示会に挑戦

栄養生命科学教育部 人間栄養科学専攻
博士後期課程2年
中本 真理子（なかもとまりこ）

食品の成分や環境汚染物質とアレルギーの関係などの研究に取り組んでいる中本さん（鳥取県出身）。大学に入って栄養学を学ぶ中で、友人の食生活が偏っているのを見て、何とか大学生の食環境の改善に役立てたらと、同じ栄養学科の3人の仲間（現在は10名）で、食育サークル「CAERUの会」を結成しました。このネーミングには「食生活を変える（カエル）」などの意味が込められています。

同会は、食に関する情報を発信するフリーペーパーを発行（隔月）。また大学生協と協力して栄養バランスを考えたメニューの提供や、地域の人たちと交流する農業体験、「とくしま・大学生のお弁当の日」や「健康食フェア」といったイベントを行ったり、「キッズ料理教室」のサポートをしたりと、食に関する幅広い活動をしています。

そんな中本さんには、イストレーターという別の才能があります。子供のころから絵を描くのが好きでしたが、「現実的には、プロとしてそれだけで生計を立てるのは難しい」と思い大学へ。しかし友だちのすすめもあり、勉強のかたわらイラストレーターとしても活躍。段ボール箱のイラストやラーメン店のポップ、各種チランなどの実績を積んできました。もちろんフリーペーパーやイベントのチラシにも生かされています。

将来は大学で学んだことを、イラストレーターとも合わせて、食育活動や仕事の中で生かせたら、という中本さん。年に一度、カフェや雑貨店などで開催している個展も今年で8回。かわいいイラストのポストカードが作品の中心になっています。

そして今年の11月に開催予定なのが『「食べる」アート展』です。作品を展示するだけの今までの個展とは全く違ったこの企画は、すでに新聞でも紹介され、中本さんは現在、その準備に全力を注いでいます。

「食べる」ことは「生きる」こと。農作物や海産物など食材を提供してくれる人、苗や肥料などを販売する人、食材を加工する人、販売する人、調理する人、食べる人。日々の食生活は当たり前のような出来事ですが、食生活を支えるどの人が欠けても「食べる」は完成しない・・・その「食べる」にまつわる人々を「アート」でつなげて、その大切さを考えてみよう。これが中本さんの発想です。そのために多くの人に会い、写真を撮り、話を聞く、という取材を続けています。

「農業体験などを通じて知り合った方や、初めての分野の人もいて、いろいろな話を聞かせていただいています。皆さんの真剣さが伝わってきて、こちらもがんばらなければと感じています」

取材した材料がどのように表現して展示されるか。それは皆さんが実際に展示会に足を運んで見てください。

information
「食べる」アート展 11月17日～29日
とよとみ珈琲
徳島県徳島市末広2丁目1-42 TEL. 088-655-8052

魅力ある授業［取材］

聞くだけでなく参加型の授業に

大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部
基礎科学研究部門 人間科学分野 准教授
福森 崇貴（ふくもりたかき）

――臨床心理学が専門の福森先生の講義は「心理学概論」。心理学の基礎と応用ですが、

「心理学というものが私たちのとても身近にあり、幅広く日常生活と密接していることを伝えたいです」

――近年日本でその数が増えてきたカウンセラーやセラピストといった職業。複雑な社会環境の中で、活躍の場が増えているようですが、そういう時代背景もあってか心理学の講義は人気授業の一つで、先生以外にも多くの授業があります。

「カウンセリングやいわゆる人生相談の専門家のような人が、テレビやマスコミでセンセーショナルに紹介されていますが、心理学という学問の実情が歪めて伝えられて、実際には違っているところも多く、授業ではそういう誤解も解いていきたいですね」

――実は、心理カウンセラーにはまだ国家資格がなく、資格体制が十分に整備されているとは言い難い状況にあります。そのために専門家としての質にばらつきがあります。

「学生が受講前にイメージしていることと違っているかもしれません。しかし新しい興味や驚きを持ってもらえるように考えています」

――先生が心理学の道に進んだのは、高校の時、進学を考えた中で、

「自分自身の心の中に、何か引っかかるものがありました。目に見えずコントロールも難しい、けれども確実に自分に影響を与えているものがあること。また非常に緊張しやすい性格もあり、そのような中で、心というものに漠然と興味深さを感じていました」

――当時はまだあまりなかった、「人間科学」という名称のついた学部名に惹かれて、早稲田大学の人間科学部へ。

「人が抱える心理的な問題に直接向き合うための学問を学びたい」と、臨床心理学を選択しました。

――授業は大教室で、学生数が多いため、なかなか一人ひとりには目が届きません。そこで、板書やプリントを使うことを中心にしています。時々使われる心理テストや簡単な実験などは、学生も興味があるようです。また指名して問いかけることで、緊張感を与えると同時に対話を大事に。授業の最後には感想や質問を書いてもらい、次の授業の最初に答えるようにしています。内容は何でも良く、タイガースファンの先生に対して、マニアックな内容も。

「筑波大学の大学院生時代に、とてもユーモラスで生徒を退屈させない先生に出会いました。私はまだまだその先生のような話術は出来ませんが、学生との対話も含めて、教室をかき回すような、参加型の授業に努めています」

読者の言葉

1：最先端研究探訪等は、一般保護者が読むので専門用語をあまり使用せずにわかりやすく簡単に説明して下さい。

2：最先端探訪や研究室にようこそなどの項目は、少し難しすぎて読んでいても途中で、やめてしまいます。

【回答】

ご意見どうもありがとうございます。本誌は大学の広報誌ですので、それぞれの教員が行う研究内容を紹介することは、大切な使命の一つと考えております。研究内容の紹介となると、やはり専門としての立場からの難しい用語や一部でしか用いられない独特の言い回しがあります。同じ研究をしている人の間では、このような用語を使うことで共通理解が深まります。

これらの用語は、当然のことですが専門分野以外の人には簡単には通じません。そこで、専門用語に関しては必要な言葉に関しては、欄外に説明をつけるとか、わかりやすい言い方に変える等の工夫をしていきたいと考えております。今回は「TOEIC」テストについての説明を若干ですがつけ加えてみました。このような試みをこれからも続けていきたいと考えております。

1：興味深く読ませていただきました。ただ、冬号が今の時期に送付されてもタイムリーな記事を読むことができないので・・・残念です。

2：冬号インフルエンザの記事について、届いた時期には、ピークも終わり、役に立たないと思った。

【回答】

『とく talk』は1年間に4回の発行ですので、各号は3ヶ月に1回ということになります。そのための編集作業は、実際の発行日時の約半年前に特集の企画を決定し、実際の取材や記事執筆は約3ヶ月前になります。また、保護者の方々への送付作業は、経費等の関係で2つの号をまとめるため、実際にお手元に届く頃には、記事で触れている内容とかなり時間がずれてしまいます。雑誌の編集作業の性格上、どうしてもこのようなことになってしまいます。この点をご理解くだされば幸いです。